

## 中山道柏原宿 山東町

滋賀県の東の玄関口に当たる山東町は、近世の街道整備の中で中山道が通り、柏原に宿場が開かれました。

19世紀頃の記録によると、宿の長さは東西十三町（約1.5km）、戸数344軒、人口1,468人、石高2,441石とこの近辺では大きな宿場であったようです。

宿には、本陣・脇本陣各1軒、問屋6軒、荷蔵は東西に1棟ずつ、旅籠屋22軒、造り酒屋4軒、そして、もぐさ屋は盛時には十数軒が軒を並べ、なかなか賑わった街道筋だったようです。

こうした山東町に多くの文化をもたらしてきた“中山道柏原宿”にスポットを当て、町並みや景観をはじめとした歴史的遺産を生かしながら、まちづくりを展開していこうと考えています。

そこで、その先駆的事業として街道沿いの旧家を改修して、町の特性を生かしたテーマを持たせながら更なる活用を図るために現在協議を重ねています。

そうした動きの中で、地元柏原では昔の賑やかな往来

を再現しようと平成8年7月21日(日)に“中山道柏原宿やいと祭”が開かれます。中山道の各宿場の紹介や物産展、柏原学区内に伝わる貴重な資料の展示など盛り沢山の催しが行われる予定です。

こうした祭を通じた地元の盛り上がりを期待しながら、文化・歴史遺産がより身近なものになればと感じるこの頃です。(桂田峰男)



旧家外観

## 情報BOX

◆伊吹町教育委員会では下記の報告書が刊行されました。

『杉沢遺跡甕棺墓の調査・谷海道遺跡』

(伊吹町文化財調査報告書第10集)

◆いぶき葉草の里文化センター(伊吹町春照37)では、5月26日(日)まで企画展『伊吹山地の縄文人一起し又遺跡発掘調査速報展』を開催しています。約50点の遺物と調査の写真パネルなどを展示しています。

(無料、月曜日・祝祭日の翌日休館)

◎共に問い合わせ先

伊吹町教育委員会生涯学習課

☎0749 (58) 1121

## ◆◆編集後記◆◆

アレ?『佐加太』は3号雑誌で、廃刊になったんじゃないか?と思われていた皆様、御安心あれ、本日第4号をお届けします。ようやく3号で奥付けの日付と実際の発行年月日が一致したので安心した編集子。ちょっと一服している間に刊行が大幅に遅れてしまいました。御愛読して下さいの皆様、まことに申し訳ありませんでした。

今後も坂田郡内の遺跡を中心に有形・無形の文化財を数多く紹介するニュースとして続けていくつもりです。当分は現在のスタイルで刊行していきますが、読者の皆様の御意見も反映させたいと思っています。お気づきの点がありましたら、ぜひとも事務局まで御意見をお聞かせ下さい。

さて、最後に問題です。怠慢編集子はこの編集後記を何年何月何日に記しているのでしょうか。

(渡連恥)

坂田郡文化財ニュース

佐加太 第4号

発行 平成8年5月1日

編集 坂田郡社会教育研究会文化財部会

事務局 〒521滋賀県坂田郡米原町下多良3-3

米原町教育委員会社会教育課

0749 (52) 1551

印刷 立木印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

## 息長古墳群の紹介

— 近江町 —

坂田郡の西端に位置する近江町には、後期前方後円墳を中心とした「息長古墳群」が存在します。この古墳群は、琵琶湖岸から約3km離れて南北に延びた横山丘陵の南端尾根と、その山裾部に分布し、同丘陵の北端に所在する長浜古墳群、さらに北方の高月町古保利古墳群と並んで「湖北の三大古墳群」に数えられています。

近年、息長古墳群では京都大学文学部考古学研究室の協力による精力的な調査が繰り返され、5世紀初頭より6世紀後葉にいたる中後期古墳群であることが判明していますが、さらに今年度より4箇年計画で、より詳細な分布調査を展開しています。代表的な古墳は次のもの。  
甲塚1号墳 横山丘陵南端の南傾する一支尾根に直径4.3m、高さ6mの円墳が築かれています。琵琶湖の標準水位(84.371m)より約115mほど高い標高199mに築かれた甲塚1号墳は、1mにも満たない不整形な高まりを北側にひかえ、造り出しを持つ5世紀初頭の大型円墳とも考えられています。

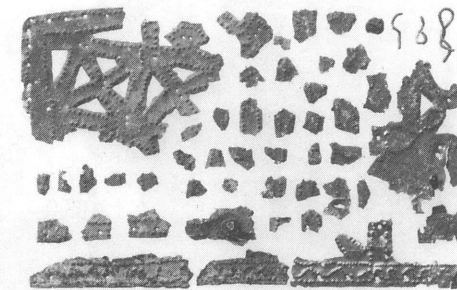
塚の越古墳 横山丘陵の尾根上には甲塚1号墳に続く5世紀代の古墳が築かれていますが、5世紀末葉から6世

紀になると、丘陵裾部へと移行します。塚の越古墳は、周濠を備えた全長46m級の前方後円墳です。既に覆土の大半を失っていますが、湖北に導入された初期の横穴式石室墳と推測されています。周濠内部と古墳裾部の調査では、石見型盾形埴輪のめぐる6世紀初頭であることが判明しました。

山津照神社古墳 明治15年に同神社の参道建設工事中に発見された全長46m級の前方後円墳です。横穴式石室の内部には家型石棺が置かれ、冠・鏡・鉄刀・水晶玉をはじめとする多数の副葬品が出土しました。近年の調査では、墳丘裾部をめぐる石見型盾形埴輪も発見されました。

狐塚5号墳 同古墳群の最西部にある埋没した帆立貝形古墳。家形・盾形・ゆぎ形・太刀形・人物・鶏形・きぬがさ形の器財埴輪と鳥形木製品が出土しています。

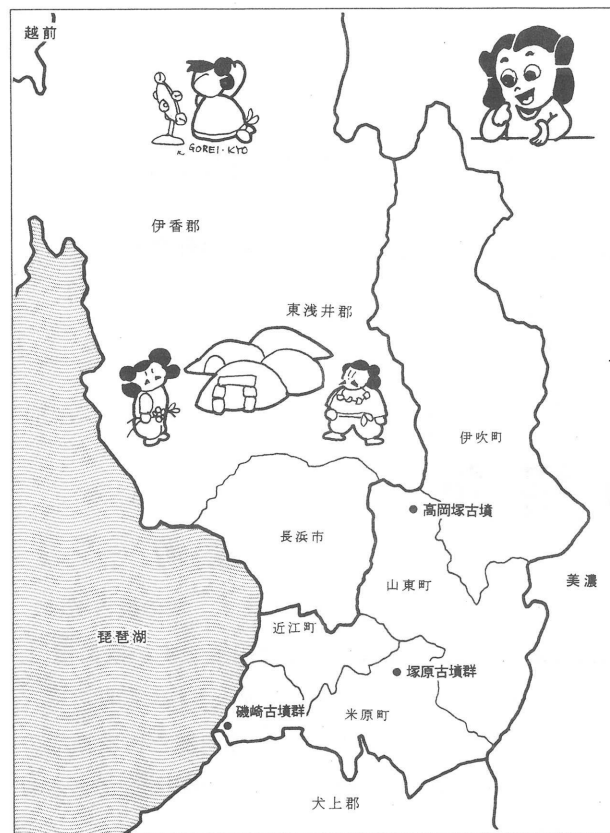
(宮崎幹也)



山津照神社古墳出土金銅製冠



山津照神社古墳出土須恵器器台



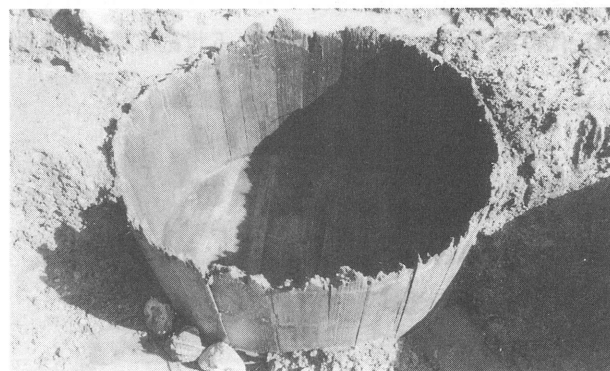
## 坂田郡の遺跡案内 古墳時代編(2)

『佐加太』3号では主に郡内の中期古墳の様相について触れましたので、今回は後期古墳を取り上げてみたいと思います。古墳時代も後期になると、凡全国的に古墳の数が増加します。御多分に漏れず坂田郡でも各所で古墳の造営が活発になります。但し、実際に発掘調査が実施され、実態が明らかになったものは、米原町醒井の塚原古墳群、同町磯の磯崎古墳群、山東町間田の高岡塚古墳等僅かな数です。塚原古墳群は三基の円墳で構成され、副葬品には豊富な須恵器類と馬具等がみられました。隣接して建立された白鳳寺院の三大寺遺跡と造営母体が同一と考えられ、古墳の消滅と仏教の普及とが密接に関わっていたことを示す一例に成り得ます。また磯崎古墳群は主体部に玄室プランが正方形の特異な横穴式石室を採用していることから渡来系氏族や海人との関連が想定されます。高岡塚古墳は玄室と羨道の区別が殆ど無い無袖式の横穴式石室を有する円墳で、時期は6世紀末から7世紀初頭と思われます。どうやら坂田郡も、日本各地で巻き起こった築造ブームの波に“はかなく”も呑み込まれていったようです。

## 観音寺遺跡の調査概要 (その2) 山東町

『佐加太』創刊号で紹介しました観音寺遺跡については、平成5年度の測量調査を皮切りに、平成6年度の発掘調査、そして、最終年となる平成7年度は、昨年実施した区域の北側を調査しました。その結果、昨年同様一見無造作に投棄されたように見える栗石が多数見つかりました。この栗石の性格については明確にされていませんでしたが、昨年の調査と考え合わせると、参道側(西側)に建物が想定出来るかのようになり、石の面を合わせており、建物基礎の土台石ではないかと思われます。この建物については、現存する建物から坊の入口の長屋門ではないかと推定されます。また、この長屋門跡の東側には、土台石と思われる栗石が更に東に延びていることから、坊舎があったのではないかと考えられます。これらの他には、位置的に坊舎屋内にあったと思われる杉材を使用した木枠の井戸や、それに伴う瓦を用いた排水路などが見つかりました。

遺物としては、そのほとんどが井戸からの出土ですが、江戸時代後半頃のものを中心とした、灰釉皿、壺や箸、蓋などが出土しました。また、併せて実施した文献資料調査の中で、近世末頃と考えられる数葉の絵図が確認され、いくつかの塔頭が描かれています。因みに、今回の調査地はこれらの絵図でいう“福寿院”であったと思われます。(桂田峰男)

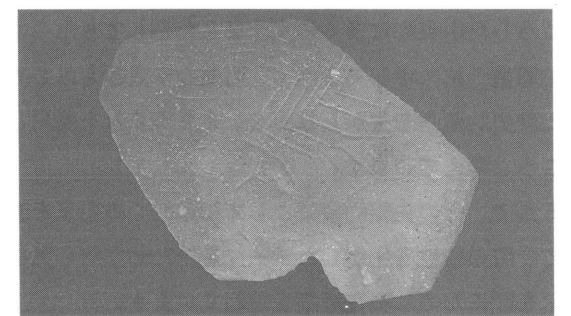


出土した井戸

## 両手を広げる人物画 ~中多良遺跡出土絵画土器~ 米原町

中多良遺跡は米原町中多良集落の東側水田地帯に立地しています。昭和62年に実施された発掘調査の結果、多量の布留式併行段階の土器が出土し、古墳時代前期後半の集落遺跡であることが判明しました。多量の土器群のなかに1点の絵画土器片がありました。手焙り型土器の覆部に相当すると見られる土器片で、外面にヘラ描きの絵画が描かれています。概して手焙り型土器の覆部には綾杉紋、波状紋、斜格子紋などが描かれる場合が多いようですが、この土器にも直弧紋状の幾何学紋が描かれています。注意して見てみると、幾何学紋の下に人物が空に向かって両手を広げている姿が描かれています。弥生時代の絵画土器には鳥が数多く画題にされています。渡り鳥が運んできた穀霊が、種籾を賦活し、そして1年の収穫につながっていくという信仰に基づき、お祭をする人々が鳥の格好をして、穀霊を招き呼びました。こうした弥生の鳥人を描いた土器が清水風遺跡(奈良県天理市)や坪井

遺跡(奈良県橿原市)などから出土しています。中多良遺跡出土の絵画土器に描かれた人物は鳥人には見えませんが、大空に向かって両手を広げる姿は、渡り鳥に対して祈りを捧げる様子を描いたものかもしれません。直弧紋という古墳時代の特殊な文様とともに描かれているところを見ると、祭りに祈りを捧げる巫子(シャーマン)の姿を描いているとも見ることができます。古墳時代前期の祭祀を知る手がかりとして貴重な絵画土器です。(中井 均)

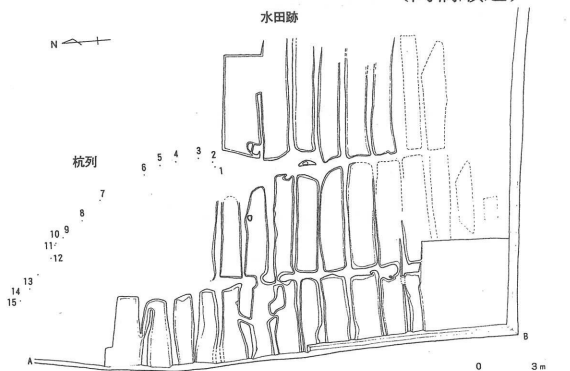


手焙り型土器に描かれた絵画

## 山間部の水田開発 (内座遺跡) 伊吹町

平成6年の暑い夏、上板並の内座遺跡の発掘調査で、規則正しい長方形の小区画が約25面見つかりました。区画はそれぞれ1m×5m位の大きさで、これを囲むあぜ状遺構は、青灰色や茶色の粘土で作られていて、幅30cm~80cm、高さ5cm~10cmありました。この遺構に伴って室町時代後半の天目茶碗が出土しました。さて、この区画は何か。調査に参加された地元の方々から、「苗代やで」「いや、寝床ちがうか」「動物を飼っていたんや」などいろんな意見がでました。そこで登場したのが『植物珪酸体分析』です。小区画遺構の土と、その上の層の土から、イネ科植物に含まれている珪酸体(ガラス質細胞)を取り出します。この細胞は、イネが腐ってなくなったあとでも、傷まないでそのままのかたちで土に残ります。分析の結果、上層よりも遺構の土の方に、多くのイネの珪酸体が残されていることがわかりました。昔、ここで栽培されていたイネのものです。この結果、この遺構を水田跡と判断しました。遺跡は姉川の上流にあり、支流の足俣川が合流する地点を望む高位段丘上にあります。現在の集落よりもさら

に高い所です。水の供給と確保という水田経営に必要な条件を得にくい所です。あまりにも小さな区画は、山間の段丘上を開く際、傾斜の度合に応じて田の水の深さを平均に保つために取られた手段だったのでしょうか。室町時代の終わり頃、私たちの祖先は、鋤や鍬や斧やもっこを使い、人力や畜力で、山際の高台に新たな水田を開いたようです。山間部の水田開発史の一端を解明できた調査でした。(高橋順之)



水田遺構平面図